

「源氏物語忍草」を読む

——付・「夏本」の紹介——

中西 健 治

はじめに

先年（二〇一一年）、和泉書院から『源氏物語忍草の研究』を刊行した。手許にある版本や写本、それに幾つかの写本を含めた校本めいたものを作り、併せてささやかな考察を示した「本文・校異編 論考編」と、版本文の自立語索引をまとめた「自立語索引編」とを合わせて二冊仕立てとして出してもらった（以下、「拙著」と略称）。それで一応はこの研究からは遠ざかって、他の物語研究に集中しようとしていた。ところがその矢さき、「源氏物語忍草」の端本である一写本を偶然にも入手したので、あらためてこれを調べてみて、ずいぶん興味ある事実が多くあることに気付いたので、作品の概要を含めて該本について調査し得たことの一部を報告しておきたいと考えた。

一 近世梗概本としての「源氏物語忍草」とその写本

「源氏物語」には膨大な注釈研究の堆積があるが、それらは原典を理解し解釈するために一定の量的文言が付加されるという点に於いて共通している。その一方で、原典を理解する方法として、「量的にも質的にも、原典マイナス・アルファの形」として形成されるのが梗概書と称されるもので、これまた多くの作品がある。中世の梗概書については稲賀敬二

氏のご研究^①があり、近年では近世期の作品をも含めての岩坪健氏のご研究^②も刊行されて展望が開けてきたように思われる。稲賀氏によると、「中世の梗概書は、入門書ではあるかもしれないが、梗概書・概説書として、それだけで完結した実用性をめざしている」もので、いわば「閉ざされた世界」としての作品でもあり、多くの歌人や連歌師の需要に応えていたと言われる「源氏大鏡」「浅聞抄」「無外題」や「源氏物語提要」などもある。それらが近世期になって出版文化の隆盛に伴い、たとえば豪華な錦絵や絵画、他の文化領域と交渉したものや原作には描かれていない場面をもとり込んだ作品などが刊行され、より多様な梗概書類が作成され、広汎な読者層に支持されていったと思われる。その中であって原典を忠実につたえようとした作品も、もちろん存在した。「源氏物語忍草」がその一つである。

「源氏物語忍草」は「源氏物語湖月抄」を著した北村季吟の嫡子で、将来を期待されながらも父に先だって死去した北村湖春の著作で、「源氏物語」の梗概書として原作の趣をよく伝えていると評価される作品でもある。「源氏物語」研究の初心者向きのテキストとして編まれた西沢正二氏編『早わかり源氏物語忍草』（一九八六年一月）の巻末に付された解説をはじめ、先行研究も幾つかはあるものの、まだ十分とは言えない状況に鑑みて、先の「拙著」のなかに「論考編」として数篇の論考を掲載しておいた。ただし西沢氏の著書の解説は巻末の六頁ながら、作者、成立、

叙述方法や諸本などについて、実に簡にして要を得たもので、従うべき見解が端的に示されている。これを受けて「拙著」では天保五年もしくは八年に刊行された版本を中心に数本の写本を用いた諸本校異を含め、「源氏物語忍草」のこれまでの活字本や、「源氏物語忍草」の表現や語句のありかたなどを考察した論考を収めておいた。「拙著」には西川響子、須藤圭両氏の表現をめぐる論考^③を収載したが、他には、「平安文学研究 衣笠編」第二輯（二〇一〇年九月刊）に掲載された三本の論考や、源氏物語の注釈史を研究されている堤康夫氏の論考に「源氏物語忍草」を扱った論文や海野圭介氏の研究^④などがある程度で、「源氏物語」研究領域においてはあまり注目はされていない課題であることがわかる。しかしそうであるからと言って、無視しておくには忍びない作品であり、また、研究対象として十分な価値のある作品であると考えられることから、「拙著」に若干の加筆を検討をしていた。

そのように考えていたとき、偶然にも「源氏物語忍草」の写本の一冊を入手した。「けむし忍ふ草 夏」と表紙右題簽に墨書した総合巻から藤裏葉巻までを収めている一冊である。大きさは縦22・9cm、横16・2cm、袋綴りで墨付き五十四丁の写本で、近世後期のものかと思われ、随所に朱の書き入れや貼り紙も数箇所ある。この写本が「源氏物語忍草」をもとに「源氏物語」を講釈しようとしたか、もしくは自分で学習しようとしたのか、はたまた原文を参照しつつ読み解こうとしたのか、いずれにしても「源氏物語忍草」が現実に活用されていたことを具体的に示す興味深い本であり、今まで参観した写本のなかでも、これほど夥しい朱書や貼り紙のあるものに出くわしたことがない。かなりくたびれた写本ではあるものの、「源氏物語」と向き合う真摯な姿勢が窺われるように思え、当然これを梗概化しようとする読み方にも及んでいることから、少しく検討に値する本であると判断したのである。ただ残念なことに、こ

の本が題簽に「夏」とある一冊のみの端本であることから、本来は他の写本同様、例えば正宗敦夫文庫蔵本「冬」本のように^⑤、四冊本で完結しているはずのものであって、どこかに他の三冊（春）「秋」「冬」が埋められている可能性が十分に予想され、他の三冊が揃った時にこそ初めて、まったく研究がなされるべきものではあろう。いま仮に本書を「夏本」と称することに若干の考察を示したい。

「夏本」は総合巻から藤裏葉巻までの二十巻を収めていることから、各巻について個々の検討が要請されるべきではあるが、「源氏物語忍草」の梗概本としての方法を検討するのに「玉鬘十帖」として扱われている一括りの話がまずは適当ではないかと判断して、まずは「玉鬘十帖」、すなわち「源氏物語忍草」にどのように「玉鬘物語」が描かれているかを検討してみたい。

二 「源氏物語忍草」での「玉鬘十帖」

原作をどの程度、梗概化をはかるために圧縮しているかを、分かりやすく表示するために、まずは大雑把ながら数字で示してみると次の表のようになる。新編日本古典文学全集に収められた「玉鬘十帖」に相当する各巻を対象として、そこに読解の手助けとして示されている各項目の物語内容を基軸として、「源氏物語忍草」がどの程度、その原作文本文に言及して梗概化を図ろうとしているのかを参照し、該当する「源氏物語忍草」の本文行数を計測するという方法をとった。「源氏物語忍草」については版本を底本とした「拙著」の本文を用い、そこに示された行数のうち、一行で十五字以上を1、十四字以下六字までを0・5として扱っておいた。なかには明確に区分しにくい箇所などもあったが、ひとまずの便宜的な処置ではある。

【「玉鬘十帖」での「源氏物語」と「源氏物語忍草」の対照表】

項目	玉鬘	初音	胡蝶	蛩	常夏	篝火	野分	行幸	藤袴	真木柱
1	7	2.5	5.5	4	4.5	5	5	1.5	6.5	6
2	8.5	7	11.5	4	6	6.5	12.5	6	11.5	—
3	9.5	17.5	—	14	—	1	3	3	—	—
4	20	0.5	11	1	3	—	2	4.5	—	—
5	6	1.5	—	—	6.5	—	3.5	2.5	7	4
6	4	—	—	—	—	—	—		4	—
7	17	—	—	1	—	—	—		5	5
8	—	—	—	—	—	—	—		12.5	12.5
9	7.5	—	—	9	—	—	—	6	—	3
10	3.5	—	—	—	—	—	—	7.5	—	6
11	5.5	—	—	—	—	—	—	—	—	4
12		—	—	—	—	—	—	2.5	—	8
13		—	—	—	—	—	—	7.5	—	3
14	4.5	—	—	—	—	—	—	—	—	2.5
15	5.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	3	—	—	—	—	—	—	—	—	4.5
17	4.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.5
20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8
25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

右の表はあくまでも大体の傾向を知るための一つの指標として示したものである。例えば、玉鬘巻では新編日本古典文学全集の項目の（四）「肥後の土豪大夫監、玉鬘に求婚する」と（七）「玉鬘ら長谷寺に参詣し、右近に再会する」とが三割五分ほどの分量を占め、（二）の「玉鬘、乳母に伴われて筑紫へ下向する」と（三）「玉鬘、美しく成人し、人々懸想する」とがこれに次いで多く採られ、併せると「源氏物語忍草」の玉鬘巻

「源氏物語忍草」を読む

の約半分以上の部分、すなわち肥後の豪族の強引な求婚から逃れた玉鬘が源氏のもとにどのように引き取られるに至ったかに重点が置かれて採られていることが明らかに。また、初音巻では「源氏物語忍草」ではその七割ほどが「生ける仏の御国、紫の上の御殿 源氏年賀」と「源氏、玉鬘を訪れ、明石の御方に泊る」に多くの筆が費やされ、六条院を中心に源氏と女性たちの華やかな交流を描くところに関心の大半が向けられていると分かる。以下、各巻において「源氏物語」のどのような話が相対的にみて多く「源氏物語忍草」に採られているかを見ておこう。

胡蝶巻

（二）「中宮の季の御読経 紫の上春秋競べに勝つ」、（四）「源氏、人々の懸想文を見て玉鬘に語る」

蛩巻

（三）「源氏、蛩火により宮に玉鬘の姿を見せる」、（九）「玉鬘、物語に熱中する 源氏の物語論」

常夏巻

（二）「源氏、西の対で和琴を弾き玉鬘と唱和」、（六）「内大臣、近江の君を弘徽殿女御に託す」（六、七を一括する）

篝火巻

（二）「初秋、源氏と玉鬘、篝火の歌を詠み交す」

野分巻

（二）「夕霧、六条院にまいり紫の上をかいま見る」

行幸巻

（二〇）「内大臣、源氏と玉鬘との仲を付度する」、（二三）「方々より寄せられる祝儀 末摘花と贈答」

藤袴巻

(二)「夕霧、玉鬘を訪れ、その胸中を訴える」

真木柱巻

(八)「髻黒外出の用意 北の方火取の灰をかける」、(二二)「真木柱、嘆きの歌を残す 女房らの悲別」、(二四)「源氏、玉鬘に消息 髻黒、返事を代筆する」

これらを概観しただけでも、「源氏物語忍草」の読者は各巻の中心となっている場面がいかなるものであるかを想起することになり、その反対にほとんど触れられないものとのない記述は原作を知らない限り、「源氏物語」には描かれていないものと理解する可能性はある。原作を知っている者にとってはいかなる梗概化がなされているかを承知することになるが、あるいは梗概化するにあたってどのように省略されたかを知り得るであろうが、「源氏物語忍草」のみを読む限りにおいては、梗概という概念も無用になっていると判断されるのである。むしろ「源氏物語忍草」に描かれる世界こそが「源氏物語」と理解されていたのかも知れない可能性はある。同時に、「源氏物語忍草」の読者が各巻の中心的記述をいくつかの纏まった話として理解することにもなる。このことは梗概化方法の検討のみならず、源氏絵巻や源氏絵、さらには絵を伴う版本との関連を考察する有力な材料ともなっていることも十分に推測できる。現に、正宗敦夫文庫蔵本は幕府御用絵師であった住吉具慶の所持本であることから、「源氏画帖類の作品遺例の少なくない住吉派の蔵書に『源氏物語忍草』があつたことが確認され、改めて『源氏小鏡』などの古くよりの梗概書とともに、『十帖源氏』や『源氏物語忍草』といった当代に作成された諸書と絵師の活動との関係を考慮する視角が提示された」(七七三頁)とする指摘もあるのである。ただ、「源氏物語忍草」と絵との関係については別途考慮する必要がある。^⑧

四

「源氏物語忍草」に多く採られている話をあげたので、逆にどのような話が「源氏物語忍草」に触れられていないかも見えておく必要がある。右の一覧表の一に該当する箇所である。もちろん話の内容についてまったく触れられていないというのではなく、「源氏物語忍草」が梗概の対象として描こうとする関心の外にあるように扱われている場合も含まれている箇所もある。

玉鬘巻

(八)「右近、三条、御堂で玉鬘の将来を祈願」、(一八)「末摘花の返歌を見て、源氏和歌を論ずる」

初音巻

(六)「源氏、男踏歌をもてなし、御方々見物する」

胡蝶巻

(三)「玉鬘の姿と源氏の胸中 柏木、夕霧の態度」、(五)「紫の上、玉鬘に対する源氏の心を察する」、(六)「源氏、玉鬘に慕情を告白 玉鬘、苦悩する」、(七)「玉鬘、源氏の愛に困惑 他の求婚者たち」

螢巻

(五)「五月五日、源氏、玉鬘を訪問 美しい容姿」、(六)「螢宮、玉鬘と「あやめ」の歌を贈答」、(八)「源氏、花散里のもとに泊る 二人の仲らい」、(一〇)「源氏と紫の上、物語の功罪を論ずる」、(一一)「源氏、夕霧の扱いに配慮 夕霧恥を忘れず」

常夏巻

(三)「源氏、玉鬘の取扱いに思い迷う」、(七)「内大臣、近江の君を訪れる 滑稽な問答」、(八)「近江の君と弘徽殿女御、珍妙な歌を贈答」

篝火巻

・ ・ ・ ナシ

野分巻

(六)「源氏、明石の君を訪れ、早々に帰る」、(七)「夕霧、源氏と玉鬘の寄り添う姿に驚く」、(八)「源氏、夕霧を従え、花散里を見舞う」、(九)「夕霧、明石の姫君を訪れ、その姿を見る」、(一〇)「夕霧、大宮に伺候 大宮、内大臣と語る」

行幸巻

(一一)「玉鬘の裳着の準備 夕霧の心懐」、(一二)「内大臣、腰結役をつとめる 源氏と歌の贈答」、(一三)「参上の人々の胸中 源氏の今後の方針」、(一四)「柏木ら、弘徽殿の前で近江の君を愚弄」、(一五)「内大臣、近江の君をからかい戯れる」

藤袴巻

(一六)「夕霧、玉鬘の件につき源氏に問いつめる」、(一七)「玉鬘の出仕決定に、懸想人たちが焦慮する」

真木柱巻

(一八)「源氏と内大臣の感想 帝なお出仕を望む」、(一九)「玉鬘、鬚黒を厭い過往を恋う 源氏の胸中」、(二〇)「源氏、玉鬘を訪れ、歌を交し思いを訴える」、(二一)「式部卿宮の態度 北の方思いわずらう」、(二二)「鬚黒、男君らを連れ帰る 紫の上の立場」、(二三)「男踏歌、諸所を巡る 玉鬘の局での接待」、(二四)「鬚黒、玉鬘の宮中退出を願ひ促す」、(二五)「帝、玉鬘への恋情に苦しむ 玉鬘の胸中」、(二六)「鬚黒の男君ら、玉鬘に懐く 真木柱の悲嘆」、(二七)「近江の君、弘徽殿の前で夕霧に懸想する」

多くの文言を費やして描かれている箇所と、ほとんど関心が寄せられていない場面を対照させてみると、浮かび上がってくるのは、その多くが登場人物の内面に深く関わる場面や行事、儀式を描く記述であることが

わかる。それらは梗概化するのに障害となる内容を含んでいるとみられるのである。原作においては詳細に記述されている場面であるが、「源氏物語忍草」では極力、触れようとしない姿勢が読みとれると判断して大きな誤りはなからう。

例えば、蜩巻。この巻は、巻名の依っている、蜩部卿宮が玉鬘の容姿を見る場面と、物語に熱中する玉鬘へ物語論を云い掛けた源氏の様子を記すれば十分な巻と判断していることが表からも読みとれ、常夏巻も近江君に関する話題は「はしたなきこと多かりし人なり」(二五二頁)とのみの言及で、あとは切り捨てているのである。篝火巻は内大臣の近江君への処遇に触れながら源氏の余裕に触れた後、玉鬘と源氏の危うい場面を取り出している。野分巻は紫の上を垣間見た夕霧のことが大きく取り上げられ、行幸巻では玉鬘の裳着の腰結役として内大臣を依頼し、源氏との長年の確執が解ける記述を末尾に据え直して纏めている。藤袴巻も玉鬘への男たち、とりわけ夕霧の動きを追うことが中心になっている。真木柱は鬚黒と北の方との動向が中心になっており、それ以外は物語の展開を追うようになっていく。これらをまとめるとおおよそ次のように分類されよう。

- A 内面にふかく関わる場面→玉鬘巻(八)、胡蝶巻(三)、(五)、(六)、常夏巻(三) など
- B 年中行事や神仏への祈りの儀式にかかわる場面→初音巻(六)、行幸巻(一一) など
- C 傍系的人物の挿話→常夏巻(七)、(八)、行幸巻(一六)、(一七) など
- D 文学論や教育論→玉鬘巻(一八)、蜩巻(一〇)、(一一)、常夏巻(八) など

つまり、物語の主要な人物の動静については極力筆を惜しまないものの、当該人物の内面に及ぶ記述や傍系的人物にまつわる話題、あるいは儀式、神事、はたまた和歌論や文学論、教育論などの理論的な事柄や人物の動静に直接には関わっていない話題についてはできるだけ省略に従っている傾向がみられる。そのことは、物語の筋を辿ることこそが「源氏物語忍草」の梗概本としての主要な関心事とされていて、そこに深く関与する事柄以外は言及しないとする基本的な姿勢によるのではないかと考えられることである。巻の最末尾にある事項が簡略になったり、ほとんど触れられていないのも、あるいはそのことを形式的な面から裏付けているのかも知れない。先にあげた『早わかり源氏物語忍草』の「解説」に、前代の梗概書の「全体的に注釈的・解説的であるものに満足できない初心者のために、より平易・平明な『源氏物語』のダイジュエストとして書かれた」(二四一頁)と指摘されていることが妥当性をもっていると言えるのである。このことは所収歌の面からも伺えるように思われる。

三 「源氏物語忍草」における「玉鬘物語」の所収歌

「源氏物語忍草」には二百六十一首の和歌がある。七九五首ある「源氏物語」中の歌数に照らしてみれば、梗概本としてはまんべんなく取り上げているように見える。この点から「源氏物語忍草」の性格に言及したのは田原南軒氏である。^⑨ 田原氏は、各巻と「源氏物語忍草」の巻ごとの所収歌数を併記して、「原典源氏の総歌数七九五首、しのぶ草にとられた歌数二六二首、約その四分の一強であることを見ても、よくその要を得たものといえようし、またそこに北村湖春の苦心もあったように思われるのです」(三頁)と、具体的な検討は措き、所収歌の数の点からみての説を述べておられる。もちろん巻によっては採択に抑制的な姿勢であった

六

り(夕顔、若紫、紅葉賀、賢木、須磨、明石、胡蝶、竹河、総角、蜻蛉、手習)、その逆にできるだけ多く採ろうとしている巻(薄雲、初音、行幸、真木柱、藤裏葉、柏木、浮舟)の違いはある。梗概本のなかには「源氏物語」所収歌はもれなく収める方針を貫くものや、各巻一首に限定するもの、歌語に重点をおくものなど、さまざまであるが、「源氏物語忍草」には歌の所収についての特段の方針があるようには見えない。少ない所収歌数ではあるものの、初音巻では五首すべて、篝火巻の二首すべてが「源氏物語忍草」に採られたり、あえて源氏の歌を採らないようにしている玉鬘巻、胡蝶巻、野分巻もあり、源氏と玉鬘との一組の贈答歌のみを採る常夏巻や篝火巻のような巻もあるが、総じて特段の傾向は見られないことから、その点できわめて表面的な分析ながらも、田原氏の見解はおおむね妥当ではないかと思われる。玉鬘十帖に限定すれば四十首(原作では九十首)の所収歌のうち、玉鬘が十首(原作では十九首)、源氏の歌が七首(原作では二十二首)採られ、その他、鬚黒大将、紫の上、明石の上、夕霧、帝は各二首採られているように人物の歌にも偏りのないよう配慮がなされているようである。

歌の数もさることながら、いま注目したいのは、「源氏物語」の歌を引用するにあたって、「源氏物語忍草」ではほとんど例外なく詠者を明確に示していることである。誰の歌が誰に対してどういう場で詠まれているか、あるいは自身で詠いた独詠であるかを明らかにするかが物語の展開をおさえる有効な方法であると判断したからに他ならない。人物の動静を必ずしも歌の内容によって示そうと考えるとはいえないことが「源氏物語忍草」の性格の一端を示すとすれば、その一方に据えられる考え方は物語のいわゆるスジの把握ではあるまいか。つまり場面の把握を容易ならしめる方途である。北村湖春周辺の人物や「源氏物語忍草」伝来の経緯などから、本書が俳諧師や連歌師などによっても重宝がられていたことは

明らかで、彼らが「源氏物語忍草」に求めたのは「源氏物語」の特徴的な場面、あえて言えば巻の基軸となるような絵になり得る美的状況の文言ではなかったか。その結果として歌が一つの証としてしるされることがあったのであるが、基本は人物とその動向に関わる歌こそが肝要であったのだ。「源氏物語忍草」の成り立ちについて言及する写本の奥書はそのことを考える上で大きなヒントを示していると思う。架蔵本の本文に校訂を加えたうえで全文を示してみよう。

光源氏の物語は世の至りたる宝にして、言の葉の道むね広く、奥深きことは青表紙よりはじめて、世々の才ある限りの人、種々の鈔を著してさとし易く、目安き筋になりけるを、猶心得易からんとて、季吟法橋鈔をあげてしるされし湖月鈔なん、まことに末の世のおろかなるを、道びくことの更なるもの也。されど婦女のまどひ、童蒙のたよりにはまた覚束なきことも多かるべし。さるを此しのぶくさは、季吟の息湖春したしき尼公のせちなるもとめ否び難くてとて、いと耳近く心得やすきやうに、一卷／＼のおもむきを短く書きとりて、此の物語の山口とせられしとなり。むべ此草子に心ざし侍らん女わらんべまで思ひ入るに、さはる樹々もなく、道をとむるにまどふべきこみちもあらず。此巻の心のおもむきやすく、其心得ぬべきはまことに此文にしかざるべし。されば此しのぶくさを此さうしのくさはひにして尋ね求めば、終に筑波嶺の雪積りて百千の舟をも伺へつべき大海のはらのむねをも授りつべきにこそ。

于時宝暦八年寅六月十日書写の功おはりぬ

「源氏物語」読解は定家以降の努力の結果、「目安き筋にな」ったけれども、「湖月抄」が出て一段と理解が進んだ。しかし「婦女・童蒙」には依

「源氏物語忍草」を読む

然として親しみにくかった。北村季吟の息子である湖春が「一卷／＼のおもむきを短く書きと」ることでようやく「源氏物語」に親しむ事ができるようになった、というのである。「源氏物語忍草」に求められたことは「耳近く心得やすき」ことを主眼とし、巻々を簡潔に纏め上げ初心者にとって適当な案内書となるように著述するということであった。「源氏物語忍草」を得ることは「源氏物語」の理解を志す者にとって大きな頼り所を手に入れることであったのだ。

四 「夏本」の貼り紙について

「夏本」には夥しい朱書き入れがまず目につくのであるが、同時に何か所かの貼り紙があつて、朱書、墨書で、かつ文字の大きさなどから同時になされたかどうか疑わしいものもある。それだけに書写された「源氏物語忍草」を手許に置いてどのように読み、いかに扱おうとしていたかに関心が向けられるのである。詳細は別稿に譲ることにして、とりあえず貼り紙について、まずは述べてみよう。

「源氏物語忍草」が成つてから版本が刊行されるまでの約百五十年間、どのような享受がなされて来たのかはよく分らないところが多く、また写本がどのような広がりやで伝播しているのかもほとんど見えない状態であつたが、少なくともこのような形で読まれていたという一つの具体的な証拠にはなりうるのではないかと思う。もつともこの写本が版本刊行の後に写されたものであつた可能性もないではないが、そして現に写本の中には版本を書写した本もあるが、知り得る範囲での写本および「夏本」には、版本には見られない常夏巻の一首があることから、いまのところ版本刊行前に書写された本と考えられ、また、朱書、貼り紙を見る限りでは、版本を参照しているようには見られないことから、「夏本」は

近世の中期から天保年間以前の本文と見ることはできよう。

明石を発つて大井の邸についた明石の尼君は昔のことを思い出して「身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く」(②四〇八頁)という歌をつぶやく。これを耳にした明石の御方は「ふる里に見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰かわくらん」と詠んで、ともに遠い播磨の国を偲ぶ場面がある。新編古典文学全集が「母尼と娘との唱和を繰り返し、短い歌物語ふうのまとめ方といえる」と注するように、ひとつのまとまりをもった場面ではある。「源氏物語忍草」においては、この母尼君の歌をもつて巻の名とするという文言以外に無いのだが、「夏本」では、明石の御方の歌一首「ふる里に」までを引き、「なと云明し暮すに源氏わたり給ひて姫君を見給ふに」との文言を加えた墨書の貼り紙を挿入し、ひとつの完結した物語の場面であることを特に示しているようである。このことは「源氏物語忍草」の叙述のありかたに、読解として十分であると判断した書写者が、あるいはこの場面の「源氏物語忍草」の描き方に付加しようと考えた書写者が、より状況を円満に示そうとしたための貼り紙ではなかっただろうか。一つの写本に貼り紙を加えることがいかなる意図のもとになされるかを推測するときに、朱書と同様もしくは類似の思考がなされたのではないかと考えることは許されるのではないかと思うのである。

そこで右以外の貼り紙について述べておこう。

ア 朝顔巻

「装束のしほたれてかたちの見苦しさに見給はぬかとの給へはなれ行こそうき事多けれどてうちそむきてふし給ふ御さま見すて、行かたけれど今宵参り給はんとし給ふ女五の宮はきのふけふまでもすちとこそ思ひ侍

るにかくねんころに女五の宮へも申遣し給へは」

イ 朝顔巻

「桐壺の帝はけんと源の内侍かたはふれを御らんして□□^(ムシ)ことにてあれとわたらせ給ひしかなとまこへて今も心はわかやきて□□□侍としふれと此契りこそわすられねおやの親とかいひしひとこととうとましく御らんしてけん身をかへて後も待みよ此よにて親を忘るゝためし有やと」

ウ 乙女巻

「源

かけきやは川瀬の浪も立かへり君かみそきのふちのやつれを

折あはれなれは朝かほの斎いん

ふちころもきしはきのふとおもふまにけふはみそきの瀬にかわる世を」

エ 乙女巻

「あらは世おとろふ末の世に人にかかるめられあなつられなん猶さえを本としてやまと魂の世に用られつひの世のおもしとなるへき□□しのみにて」

アはつぎにあげる「源氏物語」の原文を参照しながら参考本文を貼り紙としていることが明らかである。

塩焼き衣のあまり目馴れ、見だてなく思さるるにやとて途絶えおくを、またいかが」など聞こえたまへば、「馴れゆくこそげにうきこと多かりけれ」とばかりにて、うち背きて臥したまへるは、見棄てて

出でたまふ道ものうけれど、宮に御消息聞こえたまひてければ、出でたまひぬ。(中略)宮の御方に御消息あれば、今日しも渡りたまはじと思しけるを、驚きて開けさせたまふ。(②四八〇・四八一頁)

これは紫の上の心配をよそに、故桃園式部卿の邸に在る朝顔の姫君に会うために、同じ邸に在る女五の宮への見舞いと称して出かける源氏と紫の上のやりとりの場面である。紫の上の態度を気につけて、彼女をいたわりつつ、たんなる浮気心で行動はしていないと弁解する源氏の言葉を原文に即しつつ引く事で理解を助けるために貼紙を施して補っているように見える。二人の微妙なやりとりは原作の文章を必要としたのではないかとと思われるが、「女五の宮はきのふまでもすちとこそ思ひ侍るに」は分かりにくく、この傍らに「此一行きこえたし本文にも似付かはし」とか「本文にけふしもわたり給はしと思しけるを」と朱書のあることで、貼紙の後も検討が加えられていることは注意してきたい。

イは「源氏物語忍草」本文には無い。女五の宮邸で尼となつた源典侍に久々に会つて、往時を思い出しつつ贈答歌を交わす場面である。新編全集はこの場面は、「いわば幕間狂言」的であると注するように、贈答歌で纏まっている一挿話である。源典侍という人物にまつわる挿話はとくに物語の展開に関わつてくるのではない。「紅葉の賀の巻に逢給ひし源典侍のすけなり」とあり、「むかしの事ども語り給ひて」(拙著「一一七頁」)とある箇所への説明的な補注として、やや不審を残しつつも桐壺帝のことや、二人の贈答歌を抜き出しているのであろう。梗概化するのではなく、むしろ原作への回帰としての貼り紙でもある。

ウも「源氏物語忍草」には無い。乙女巻の冒頭に源氏が前斎院朝顔の姫君を思い出して歌を贈り、姫君がこれに応えるという場面である。「加茂の祭りの日は斎院へ源より斎院にておはせしむかしを思し出るやとて、

「源氏物語忍草」を読む

ふみなどつかはし給へり」(拙著「一二〇頁」)と、ことの経緯についてのみ触れている箇所にある貼り紙である。ウはその事情を贈答歌を掲げることので一つの場面を具体的に添える効果を果たしている。「かけきやは」の歌の右にさらに朱書で、「文は紫の紙たて文にて藤の花につけ給へり」と添え、朝顔の姫君の返歌「ふちころも」の歌の右傍下にも「淵瀬岸の字立入りたる哥也」と朱書で解説を付している。源氏から贈られた歌の紙などの様子、また朝顔姫君の歌には縁語のあることが示されているように、贈答歌についての補充的な文言があることから、イヤウの貼り紙を施したことと同様、明らかに和歌に関心を寄せた者の加筆であることの意味が明白になってくるのではない。

エは夕霧の教育についての源氏の言。「源氏物語忍草」にも源氏の教育論は触れられているが、「大和魂」を用いて学問の重要さを述べる箇所を特段に貼紙の形にしていることは、この貼り紙が特に重要だと考えたものの所業によっているかと思える。これは先の四枚の貼り紙とは異なっているが、教育論のいわば中核となる「大和魂」を引用することに眼目が置かれているのではないかと思われ、かなり飛躍した憶測かもしれないが、「夏本」が講釈の場、あるいは教育の場を意識して用いられた痕跡なのかも知れないと思うのである。いずれにしてもこれらの貼り紙は、「源氏物語」の該当箇所をたんなる梗概として扱わずに、より幅広く説明を要すると考えての措置であつたと考えられるのである。

五 「夏本」の朱書き入れについて

先にも述べたように「夏本」には実に夥しい朱の書き入れがあり、「源氏物語」の本文を時に参照しつつ、適切に説明を必要とする場面で貼り紙をしたり朱書を施しているらしいのである。例えば和歌の解釈であつ

たり、「源氏物語」本文であったり、主語や目的語を記入したり、さらには語句の補足的な説明を加えたりという、かなり自在な朱書を施しているのである。それは一体なぜ必要であったのか。おそらくはこの本文を用いて「源氏物語」を読んだり、場合によっては講釈をするときに手許に置いて参考的に用いるためではなかったか。時に原作に及ぶのは当然としても、その物語的な場面について言及したとき、その場面の状況を補足するために心覚えとして記入することがあったのではないかと思われる。梗概本である場合には、とくに省筆がちになる箇所への補助的な説明文言が要請され、単なるあらすじを述べるだけの梗概本ではあるものの、可能な限り原作の意図を簡便に理解する手法が重視されたはずである。浩瀚な「源氏物語」であればなおのことであつたろう。「夏本」はそのことを如実に示しているのである。いま朱書のいくつかの事例を示そう。薄雲巻にも朱書は多い。明石の君が源氏のすすめに従い、娘を手放すところの本文は次のようにある。

二条院へつれてゆき紫の子にせんと思せど明石離れがたく悲しみ給へばさすがにさもえし給はで（*）此姫君のはかまぎはいかにし給ふべきとあかしへ源よりの給ひつかはしける

（拙著・一〇八頁）

*の箇所には「夏本」では次のような長い朱書が行間に記されている。

（明石の御方）ためらひておはす明石の御方も故ならぬ身にそへ奉らすはか／＼しき事も有まし―（コレヨリ貼紙ニテ朱書ヲ続ケル）其内にもし此子の上の御はらに姫君出来たまは、いよ／＼いせひおとるへしとおもひきりて養子につかはし姫君の御ためよろしきやうにこそせめ

と思ふ折ふし

これは明石の君が姫君を手放す事にいたる悩みを補足的に説明していることになる。「湖月抄」に引かれる「師」説が「みこ大臣の女にても、本台腹とおとり腹とは思ひいれちがふを、まして今明石の上の腹などは、やむごとなきかたがたの腹などに御子出来たらば、こよなくけおされ給ひなん、とかく紫の上の養子にして可然と尼君申さるる也」（中・一五六頁）と注していることとほぼ同様な内容である。ただし、朱書の方がかなり平易な表現になっていて、逆に湖月抄所引「師」説が改まった言い方になっていると言えよう。また、引き取られた姫君が紫の上になつたところ、

紫の上にいとよくなづき給へば美しきものえたりとおぼしていとをしかりいだきあつかひもて遊び給ふ

（拙著・一一〇頁）

の「給ふ」の右傍らに朱線を引き、次のような朱書を記入している。

明石の御方いかにつれ／＼ならんとおほして年の内に忍ひて源おはしましたり御文なともさい／＼遣し給へり

この朱書は、紫の上のもとに引き取られた明石の姫君が紫の上を母と慕つてなつく記述の後に「年かへりて・」とある間に、源氏が明石の君への配慮をどのようにしていたかを原作から要点を捉えて記入していると思われるものである。すなわち、「大堰には、尽きせず恋しきにも、身のおこたりを嘆きそへたり」（②四三六頁）と、姫君を手放した側の人物の悲しみと後悔、それを慰める源氏の慰問が原作には添えられていて、

事態が単純には展開していないことを補っているのである。「源氏物語忍草」はこの後、大堰へ出かける源氏を見送る紫の上の歌を掲げる。

源あすかへりこんとの給へばむらさきの上

舟とむる遠方人のなくばこそあすかへりこんせなと待みめ

(一一〇頁)

この場面、「源氏物語」には次のようにある。

「明日帰り来む」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。

舟とむるをちかた人のなくはこそ明日かへりこむ夫と待ちみめ
いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

行きてみて明日もさね来むなかなかにちかた人は心おくと

(②四三九頁)

これは「源氏物語忍草」にも贈答の場面として採られていて、紫の上の歌の後に「夏本」には朱書で次のようにある。

と中将の君といふ女房を御使にて追掛ていはせ給へはほほゑみて

原作と比較すれば明らかのように、朱書は紫の上の贈歌の状況とそれに対する源氏の表情を併せて書きこんでいるのである。「源氏物語忍草」では、「大井にて姫君の事ども語らせ給ひ二三日逗留して帰らせ給へり」(二一〇頁)とあるが、「夏本」の朱書は「本文には二三日ともなし」とあり、原作には逗留期間の記述のないことを指摘している。これは明らかに

「源氏物語忍草」を読む

に原作を参照しながら書きこまれている朱書であることを示している。夜居の僧を常に帝の側に居るようにと命じたことで冷泉帝が源氏と藤壺との秘事を知ることになるのだが、そのところで、「源氏物語忍草」は「源の給ふにより伺公せられける」(一一一頁)と記す。「伺公」の傍らに朱で「夜昼侍りする」と朱で書いている。これなどは明らかに語句の注であろう。この類もまた多い。また、「入道の宮御事顕れぬやうにと此僧都に御祈をたのみ給ひしに」(一二二頁)と秘事の漏洩を恐れ、隠すやうにと依頼する「此僧都に」の右傍らに「忍ひ給ひて」と朱で書き入れている。物語の展開に沿って書き入れたものである。物語の内容を追いつつ補助的心覚え的なものが朱書に込められていると見るならば、このあたりの息詰まるような記述にはどのような朱書があるか、興味があるところであろう。主なものに次に引用しておこう。上段が「源氏物語忍草」の本文、下段が朱書本文である。

○夢の心ちせさせ・↓しはし物をも聞へさせ給へるに／(夢の)やうに
思召すかくと告す□親を見くたし罪ふかき身なるへきによくしらせ
しと伝ある

○かしこまりたる御もてなし也↓やまひたる御もてなし也源氏はかし
こき御心なれはいかにしてきこし召つらんとあやしかり給ふ

○式部卿のみや↓そののち／桃園式部卿源ノ伯父権斎院ノ父

○世の騒しきを思し嘆きて↓源きりつほの帝の御弟源の御伯父也は、き
(、)あふひの巻の式部卿と同じ事也かく人々多くかくれたまひて世
もさわかしく

○ほのめかせ↓ある時

○位をゆつらんと↓御(位)につき給へときこえ

○うけひき給はねば↓(ば)ノ右下ニ 帝ほひなく思す

○きう車ゆるされ↓(ゆるされ)て出入し給ふをみかとはあかすと□御覧す
 ○禁中へ↓内裏のうへは

○出入りする↓を牛車ゆるさるといふ

○絵合の巻↓に帝へ参り給ひ齋宮をおほしい□し〜てさふらひ給ふに

御さとは源氏の御方也此頃二条の院へ

○いろ／＼のはなしの序に↓御物語ともし給ひて

○いづれを面白く思すと↓御心の引かたに聞に立侍りて庭のけしきに作
 て御覧せさせんと給へは

○秋こそ↓いと、あはれに催され

これらを総括して見るに、語句の注釈というよりも、物語そのものを読み解きながら、文脈に重きを置いた朱書き入れであることが見て取れよう。特段に古注釈を引用したりはせず、物語の展開を読者の立場から丹念に解き明かしていこうとする、いわば学究的姿勢よりも、より真摯な姿勢で物語本文に臨んでいるように思えるのである。ただし、常夏巻の近江君の歌についての注(「近江君の歌無心所着の詠様此巻にあり云々」は「孟津抄」の「近江君ノ歌也。歌体無心所着也」に通い、藤袴巻の「蘭」の注記に「らには菊の花也哥には藤はかまとよむ也」は「源氏物語抄」の文言に通う。これらから、注記が和歌の詠みぶりに配慮がなされているように見え、その他の細々した注記も和歌の箇所集中している。これらのことから、前節の貼り紙と同様、朱書を施した人物は、あるいは歌人、あるいは連歌師、はたまた文芸に関心を寄せる文人であり、朱書は彼の所業であったと考えてよいのではないかというのが今のところの結論である。

おわりに

「夏本」は、「源氏物語」の梗概書である「源氏物語忍草」を書写した後に、原作を参照しつつ講釈あるいは注釈を施して読もうとした痕跡を明確に示している本であった。夥しい朱書、貼り紙等はその格闘の様相をつぶさに示しているように思え、他の「春本」「秋本」「冬本」をもしも見ることが出来たならば、あるいは壮大な近世の「源氏物語」読解の一樣相をつぶさに知ること出来るだろうと思う。偶然、架蔵となった粗悪な写本から多くのことを学び得たように思った次第である。

注

- ① 稲賀敬二氏『源氏物語の研究 成立と伝流』。また、『稲賀敬二コレクション・3 『源氏物語』とその享受資料』にも説かれている。
- ② 岩坪健氏『源氏物語の享受 注釈・梗概・絵画・華道』
- ③ 西川響子氏「源氏物語忍草の表現―源氏物語本文との表現の比較から―」須藤 圭氏「所収歌から見た『源氏物語忍草』の梗概方法」(拙著)所収
- ④ 荻田みどり氏「『源氏物語忍草』が描く「数ならぬ身」・岸本悠子氏「『源氏物語忍草』における巻名への意識―巻末表現と関連づけて―」・須藤 圭氏「天理大学附属天理図書館蔵「紫のふくさ」の年立について―『岷江入楚』『湖月抄』との比較から―」(『平安文学研究 衣笠編』第二輯・二〇一九)
- ⑤ 堤康夫氏「架蔵『源氏忍草』に関する考察(二)―その増補本『源氏小鏡』なることを論ず―」(『源氏物語注釈史の資料と研究』所収 堤氏御架蔵になる「源氏忍草」写本二冊で内容は「源氏小鏡」の増補本とのこと)・同氏「架蔵『源氏忍草』に関する考察(二)―その独自性について―」(同書所収)
- ⑥ 海野圭介氏「『源氏物語忍草』(冬)(住吉具慶所持本) 解題」(『正宗敦夫収集善本叢書・第一期第六巻』)

- ⑦ ⑥に同じ。
- ⑧ 絵を伴う版本が多くの読者を獲得していたことは「十帖源氏」や「おさな源氏」などを考えてみればよい。その意味で「源氏物語忍草」は絵のない版本であるために多くの異本を生じることがなかったのであろう。また、近代になってからの活字本のうち、大正十五年九月刊の関根正直校訂の「新型名著文庫」に収められたのは、各巻について一、二枚の版本の絵を挿入している形式であるが、それ以外は、まったく絵を伴っていない。関根正直は明治三十九年刊の袖珍名著文庫では文字のみであったが、その後の「新型名著文庫」に挿画を組み込んだのは実に卓見であったと言いうべきである。
- ⑨ 田原南軒氏『現代語訳源氏物語しのお草』（私家版・一九七八・五）
- ⑩ このことに関しては「拙著」の「論考編」「写本（満光本）の跋文から伺えること」を参照してほしい。春曙文庫蔵本の跋文に記される五流斎桑老父布門、婆束、女媒などの俳諧師たちにとっても「源氏物語忍草」は有用な書であった。拙著『平安末期物語攷』所収「春曙文庫蔵源氏物語忍草について」参照。
- ⑪ 「拙著」所収「論考編・六・写本（満光本）の跋文から伺えること」参照。
- ⑫ 拙稿「『源氏物語忍草』の一写本について」（『論究日本文学』第百三号・二〇一五・一二）
- ⑬ 新編日本古典文学全集による。巻数と頁数を示す。以下、「源氏物語」本文は本書を使用する。
- ⑭ 『源氏物語湖月抄（中）』（講談社学術文庫）による。

- ⑮ 『源氏物語古注集成・五・孟津抄（中）』に「近江君哥也 妹無心所着なり 万葉にも此格有之何とも難心得哥なりいか、さきいかてあひみんとはいはむはかりの用ひてこそあるらめときこえてこそとなり上下調らぬ哥也」とある（一五六頁）。「花鳥余情」にも類似的の注はある。
- ⑯ 『源氏物語湖月抄（中）』（講談社学術文庫）所引「抄」は「蘭はふぢば かまと訓すれば、服衣の藤衣のかたにとりなせる歟、うたの心はさ見えた」とある（五五一頁）。

（付記）宮川真弥氏の近年の一連の北村季吟研究（「北村季吟の源氏学（一）」（『詞林』第五十七号）／「伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾」（『語文』第百四輯）／「北村季吟の源氏学（二）」（『詞林』第五十八号））などによって、北村季吟研究と併せて湖春の業績も明らかにしつつある。とりわけ「詞林」五十八号には、⑥に触れた「冬本」の祖本にあたる洲本市立図書館蔵「源氏物語忍草」四冊本についての紹介と考察があり、「源氏物語忍草」研究を大きく前進させたものとして注目される。御教示いただいた宮川氏に感謝したい。なお、稿者は別に「論究日本文学」（第百三号・二〇一五・一二）と「平安文学研究 衣笠編」（第七輯・二〇一六・三）とに、それぞれ異なった観点から該本についての考察を述べた。併せて参照されたい。本稿は二〇一五年六月二七日の日本文芸学会全国大会（於、立命館大学）での講演原稿による。

（本学特別任用教授）